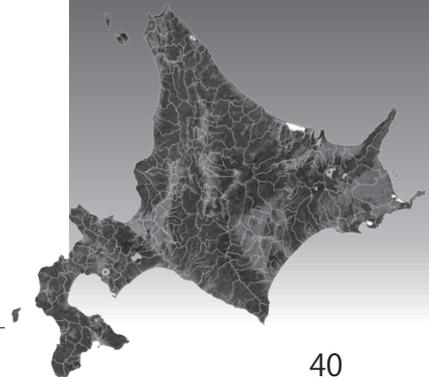


経営と健康

第2回

北海道名付け親・松浦武四郎

講談師 一龍斎貞花



北海道に人が住み始めたのは、約二万年前の水河時代と推定され、十三世紀頃から江戸時代にかけて先住民アイヌ民族独特の文化時代が続き、十五世紀後半アイヌと和人の対立。争いを鎮圧した蠣崎氏（始祖は室町時代の武田信広・甲斐源氏若狭武田の子孫）。後に松前を名乗り慶長九年（一六〇四）一月、徳川家康から蝦夷地の領地権、交易の独占権を得て、渡島国津軽郡（松前郡松前町）にて松前藩成立。緑高一万石、渡島半島の和人に限られていたが、蝦夷地支配を次第に強めて藩

領化していった。

藩成立前から松前氏は、アイヌの人からうまい汁を吸っていたんです。

寛政十年（一七九八）、幕府は二百人近い大巡察隊を派遣。別動隊に近藤重蔵を中心とする一隊もあり、重蔵は廻船問屋高田屋嘉兵衛と意気投合し、協力して漁場の開発に当り、北海道開発の基礎を築いた人と言われる一方、アイヌの人々から搾取した人とも言われ、その利益から全盛時代屋敷は、東西五十間、南北八十間五万坪、十棟以上の蔵が立ち並んでいたというほどで、相当うまくやっていたんですよ。

アイヌの酋長を名主、名前を和風の何助とか、何左衛門などを名乗らせ、生活、風俗も、本州の人々と同じようにすることを義務付けます。そうすることがアイヌの人のためになると考え

た。

しかし、これはアイヌの歴史を踏みじり、従わせるやり方でした。

寛政十一年、巡察隊の報告で、これまでのやり方が間違っているのに気付いた幕府は、松前藩に代替地を与え、以後七年間幕府の直轄地にして、蝦夷地取締り御用係を派遣、遠山の金さんの父景晋も任命され、西蝦夷地に派遣されている。

伊能忠敬、間宮林蔵、松田伝十郎らが蝦夷地に入り、地図を作ったのもこの頃。

文化四年（一八〇七）オロシヤの軍艦がエトロフを砲撃、自分の国の土地を攻撃するはずがなく、日本の領土だったんです。

紛争は続いたものの、その後日本は文化・文政のバブル時代となり、ロシ

アのことなどすっかり忘れて、蝦夷地を再び松前藩の支配に戻してしまっ

た。
エゲレスから独立したアメリカが、鯨の油はエネルギー源として利用価値があると、北太平洋に進出。黒船襲来も捕鯨船の水と薪など補給地としてきたんです。それがいまでは捕鯨大反対。「白鯨」という世界的ベストセラーもあるのに、哺乳類だからいけないという。牛はいいのか、アメリカで牛肉禁止したらどうなるのか。それぞれの食文化、鯨を食べるのは日本だけじゃない。

ロシアだつて黙っていない。西洋事情に詳しい仙台藩の林子平が、蝦夷地開発と、海の守りを固める必要があると発表したのが、「取り留めのない噂を流し、国の防備に口を出すとはけしからん」と子平を幽閉してしまった。こ

ういう台閣（内閣）だから、幕府終焉に向かつていったんです。今の政府は大丈夫ですかね。黒船襲来後、武器の値段が五倍〜十倍に値上がり、英国公使パークスは「武器は言い値で売れる」と。戦闘機 F 35をはじめ買えといわれて、ハイハイ。予算 101 兆円、税込 62 兆円、一年で 39 兆円の赤字。増税は借金を減らすためと思ったら、赤字が増えるという、どうなんでしょう。

武四郎、北の大地へ

蝦夷地の変遷を知った武四郎は、

「長崎でこうしていいよいものか。よし、まず故郷に帰り、両親の墓参りし、それからだ」

十五年ぶりに故郷へ帰り、母の三回忌と父の七回忌を済ませ、

「これで蝦夷地へ旅立つことが出来る。西国へ行くのとはわけが違う、お参りして行こう」と、伊勢神宮に旅の安全を祈り、故郷を旅立ったのは二十七歳の春でした。

津軽の鰺ヶ沢から松前へは海上十八里。ところが松前へ行く者は厳しく調べられた上、渡ることが出来ません。

「伊勢の方ですか。お伊勢さんへお参りしたいと思っても行けないので、お札（ふだ）を書いて下され」

「伊勢大神宮」とお札を書いて、お札を買ったり、篆刻で飢えをしのぎながら、東北の暖かい人情に助けられ旅から旅の日々。

武四郎が、初めて蝦夷地と呼ばれた北の大地の一角、トウヤ湖の絶景に心を奪われたのが弘化二年（一八四五）二十八歳の時でした。

案内してくれたアイヌの男性二人に、瓢箪に入れた酒を振る舞うと喜んで、海岸から大きな鮑を採ってきて、鮑の刺身で酒を酌み交わし、心を通じ合われます。

幸い江差で箱館（函館）の商人白鳥新十郎と知り合い、函館から大沼有珠、室蘭、白老、日高、エリモ岬から釧路、厚岸、知床へ。白鳥と浜田屋がこの辺りまでの請負人で、総てを手配してくれたお陰で行く先々で馬を借り、丁重なもてなしを受けて旅を続けることが出来ましたが、その一方で請負人の力がいかに強大であるかを知り、蝦夷の奥地へ入って行くにつれ、アイヌの人を全く顧みないで、和人が

支配していることを知ったのでございます。

知床半島の岬の先端に、勢州一志郡雲出松浦武四郎と大書した柱を立て、五ヶ月の旅を終へ、翌年再び奥地へ。

「こんなところまで、和人がやって来なすつたぞ」

「随分小柄な人だな」

「手前は、松浦武四郎と申す者、この蝦夷へ参ったのは二度目でございます。お主たちと近づきになりたいと思っておるので宜しくお願い申す」

「和人は皆そう言うが、まあ火に当たって下され。客人にたばこを」

一服吸うと、次の者に。車座になって火に当り、たばこが次々と廻される。アイヌの神は火の神です。武四郎も一服吸うと隣へ廻した。

「オイ、和人がわしらと一緒に煙草を吸ったぞ」

「うん、今まで来た和人とは違うぞ」

「お腹もおすきでしょうから、どうぞ召し上がって下さい」

とっておきの米を炊いてご馳走してくれる。

「それではお主たちが食糧に困るであらう。米ならわしも持参しておるので、これを」

「和人の旦那さん、そんなことされんでもよい。もてなしするのはわしらがいつものこと。心配しなざるな」

「それでは、わしの心がすまん。わずかだが」

「金がほしくて致しておりませんじゃ。それに金など貰っても使い道がありません」

金など好まぬことを知った武四郎は、その後何本かの針と糸を持参すると大喜び。

一緒に食事をし、贈られた熊の毛皮にくるまって一緒に寝る。

「この和人は、他の和人とは違う」

好意をもって迎えられ、道案内をしてくれたり、これまで日本人が行ったことのない奥地へ行くことが出来たのでございます。

更に三年後三回目の旅は、クナシリ、エトロフなど千島探索。アイヌの言葉もかなり出来るようになり、三十二歳の武四郎は立派な蝦夷通と、知られるようになっていきました。

アイヌの人々の立場に立つて考え、行動した武四郎。克明に調べ膨大な記録を残していくのでございます。